

埼玉県縄文時代の石器の石材と採取地
—打製石斧、石皿、磨石および凹石—

松岡喜久次

1. はじめに

縄文時代は、今から約16,000年から約2,400年前の期間とされ、その間は草創期、早期、前期、中期、晩期と細分されている(石田, 2024)。とくに前期～中期は温暖な気候であり、貝塚の分布から内陸まで海が侵入したとされている(図1)。また、遺跡からは縄文土器とともに石器も産出するが、主に縄文土器により時代が推定されている。石器とは石を材料として製作あるいは使用された痕跡が残されているもので、^{やじり}鏃や^{せき}石斧の他に^{いしざら}石皿、^{すくい}磨石および^{くぼみいし}凹石などがある。

山本（1989）は本州東半部地域における32地点の縄文時代中期の石材利用傾向を調べ、石器の種類・形態により石材を選択的に利用していた可能性があることを明らかにした。比田井（1995）は南関東地方の旧石器時代の遺跡に近接する河川礫の現状調査に基づき、遺跡周辺で獲得できる石材と石器石材の供給について明らかにした。大工原（2008）は石皿、磨石および凹石に結晶片岩や安山岩などの板状の石材を利用していることを報告している。長崎（2011）は旧石器時代の石斧の石材に立川礫層や多摩川の河原の礫を利用したと推定した。

今回、埼玉県の縄文時代前期～中期の打製石斧、石皿、磨石および凹石の石材について調査し、石材利用の地域性の存在が明らかとなったので報告するとともに、石材の採取地にも触れる。なお、2024年地学団体研究会第77回つくば総会のポスターセッションでその一部を報告した（松岡，2024）。

2. 調査方法

調査範囲は埼玉県北部の深谷市から南部の和光市までの西側の平野部とし、秩父市については1ヶ所を対象とした(図2)。各市町村の埋蔵文化財調査報告書により、各縄文遺跡から産出した打製石斧、石皿、磨石および凹石の個数とそれぞれの石材について調査した。打製石斧については30個以上を産出した遺跡を11ヶ所抽出した。石皿、磨石および凹石については、各遺跡から産出が少ないため、近接する数カ所の遺跡をまとめて6地域で集計した。

石器の器種である打製石斧、石皿、磨石および凹石の区分については、埋蔵文化財調査報告書に従った。また石材の岩石名については、各報告書により微妙に異なることから本報告における区分を統一した（表1）。



図1 奥東京湾と貝塚の分布（宮崎ほか，2003）

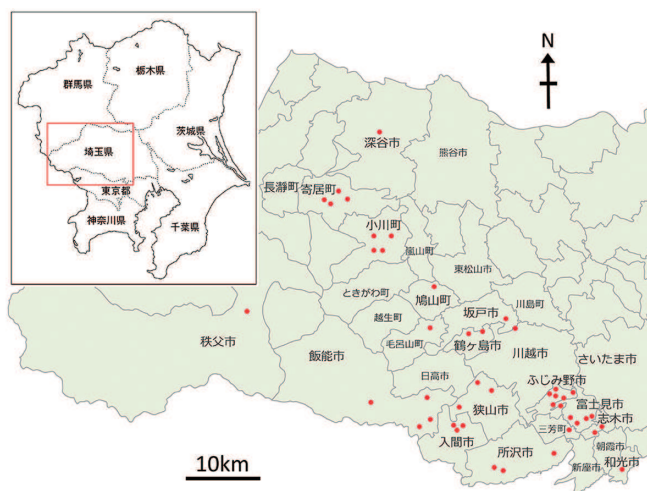


図2 調査した遺跡の位置

3. 打製石斧

石斧は木の柄をつけて、樹木の伐採や土堀りに使用したとされる。打製石斧は石に打撃を加えて石を割ってつくった石器であり、石を磨いてつくった磨製石斧とは区別している。縄文時代前期～中期の遺跡からは、磨製石斧に比べて打製石斧の産出が多いことから打製石斧を石材調査の対象とした。

1) 打製石斧の形状

図3aは砂岩製の打製石斧で、短冊型の完形である。図4aはホルンフェルス製の打製石斧で、上端が欠損している。砂岩やホルンフェルス製の打製石斧の形状において、石塚(1997, 2007)、早坂・隅本(1999)および古谷(2017)では片面に自然面を残す、斉藤・早川(1997)では表裏面ともに礫面を残し、裏面には原石面を残すとの報告がある。熊澤・油布(2015)では原礫面を残し、古谷(2017)では表面に自然面を多く残し、石塚・安井(2017)では表面に原礫面が残っているとの報告がある。

2) 打製石斧の石材

埼玉県内の打製石斧の石材利用傾向では、秩父市を除いて、砂岩とホルンフェルスを合わせた割合が70～87%と高い(図5)。砂岩とホルンフェルスの比率は、狭山市の南東では同率または砂岩50～63%と卓越し、狭山市の北西ではホルンフェルスが49～64%と卓越する。秩父市では閃緑岩の占める割合が32%と最も高く、他地域とは異なる。小川町に限ると、市街地では凝灰岩、緑色岩および変斑れい岩で28%を占める(図6, 八幡台遺跡 高橋・新井, 2007など)。また、泥岩は6～20%を占めるが、その中で頁岩が40～90%を占める。

4. 石皿, 磨石, 凹石

石皿は木の実などを磨り潰すために、磨石とともに使用したと考えられている。そして、凹石は丸い石の中央部に浅い凹みがある石器で、木の実などを割るまたは石器製作のために使用したと考えられている。

本 報 告	各報告書の記載された岩石名
砂 岩	粗粒砂岩, 細粒砂岩, 硬砂岩, 細礫砂岩, 片状砂岩
泥 岩	頁岩, 粘板岩, 珪質泥岩
凝 灰 岩	緑色凝灰岩, 輝緑凝灰岩
結 晶 片 岩	片岩, 緑泥石片岩, 緑色片岩, 黒色片岩, 石英片岩, 紅れん石片岩
緑 色 岩	玄武岩, 輝緑岩
閃 緑 岩	石英閃緑岩, 花崗閃緑岩, 花崗岩
チャート	
石灰岩	
変斑れい岩	
ホルンフェルス	
安山岩	

表1 本報告における石材の区分

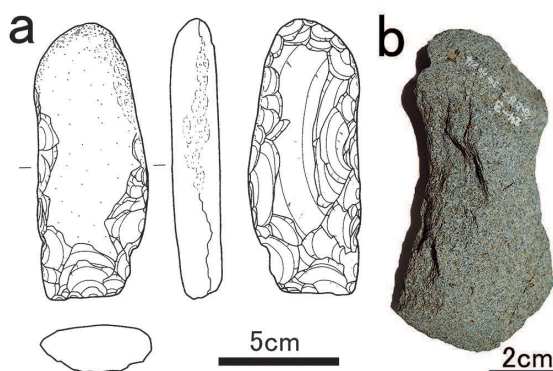


図3 砂岩製の打製石斧

a: 西原大塚遺跡(尾形・安井, 2017), b: 小川町の谷上遺跡

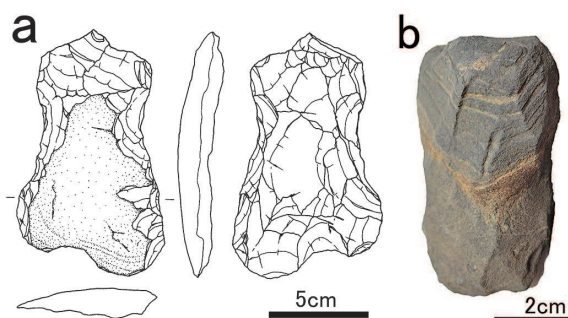


図4 ホルンフェルス製の打製石斧

a: 稻荷前遺跡(堀, 2005), b: 小川町の谷上遺跡

1) 石皿, 磨石, 凹石の形状

石皿の外形は楕円形～方形で、中央部が浅くへこみ、縁は丸く加工されている(図7b)。遺跡から産出する石皿は欠損していることが多く、図7aでは全体の約1/4程度が残

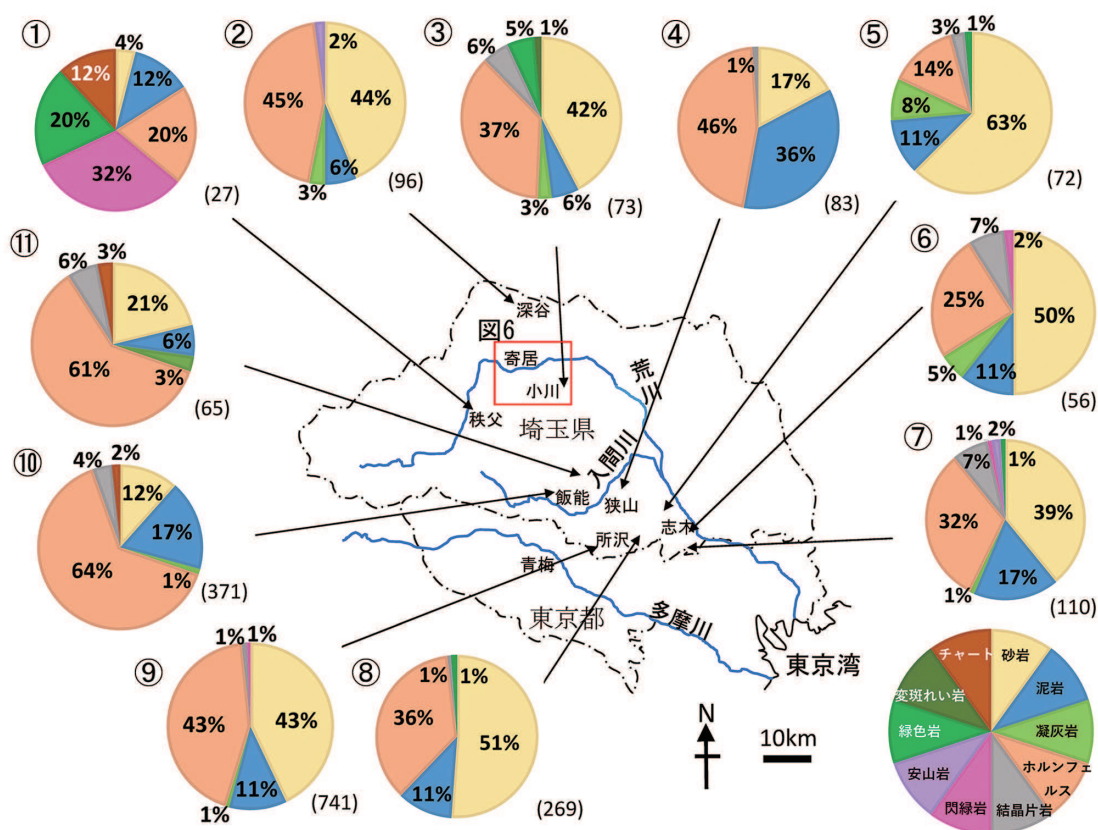


図5 埼玉県における縄文時代の打製石斧の石材利用傾向 ():調査個数

①中村遺跡(伊藤, 2001)②小台遺跡(澤出, 1987など)③日向遺跡(吉田・新井, 2002など)④ふじみ野西遺跡(鍋島, 2009)⑤稻荷前遺跡(堀, 2005)⑥西原大塚遺跡(尾形・深井, 2007)⑦吹上原遺跡(鈴木ほか, 2015)⑧東原遺跡(古谷, 2017)⑨海谷遺跡(中島・新藤, 2003a)⑩加能里遺跡(熊澤, 2016)⑪鶴ヶ島中学西遺跡(齊藤・早川, 1997)

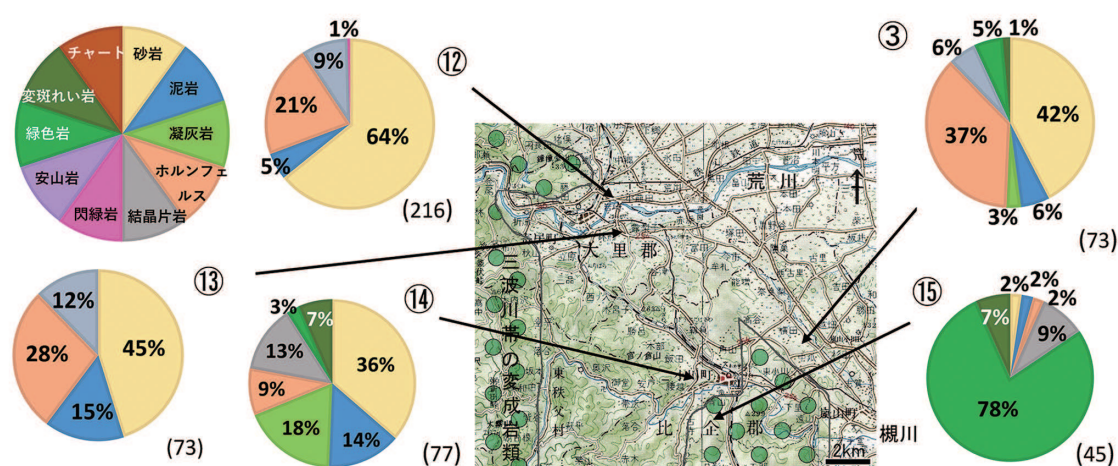


図6 小川町と寄居町付近の縄文時代の打製石斧の石材利用傾向 ():調査個数

国土地理院の20万分1の地勢図に加筆。③日向遺跡（吉田・新井，2002など）⑫中小前田2遺跡（石塚，2001など）⑬むじな塚遺跡（石塚，1998など）⑭八幡台遺跡（高橋・新井，2007など）⑮アドニス小川カントリー倶楽部内遺跡（高橋・吉田，2011）

存し表面に擦痕が認められる（石塚・安井，2017）。石皿の表裏両面にロータ状の凹みが見られることが多い。磨石と凹石は楕円形や卵形を呈し、磨石には擦痕が認められ（図7c, d）、凹石は表裏両面に1～3カ所のへこみが見られる（図7e, f）。

石皿、磨石および凹石の形状を比較するため、埋蔵文化財調査報告書の計測値より、長径と厚さについてまとめた（図8）。図8では、完形またはほぼ完形である石器を対象と

したことから、石皿の個数が少ないため、石器のデータは全調査遺跡から抽出した。

石皿の長径は15～55cm、厚さは3～10cmで、平均値は長径30.0cm、厚さ5.9cmである。石皿の形状は薄く広い板状をしている。とくに結晶片岩の厚さは3～8cmとさらに薄く広い板状をしている。

磨石は長径5～15cm、厚さ2～8cmで、平均値は長径10.2cm、厚さ4.2cmである。凹石は長径7～25cm、厚さ1～7cmで、平均値は

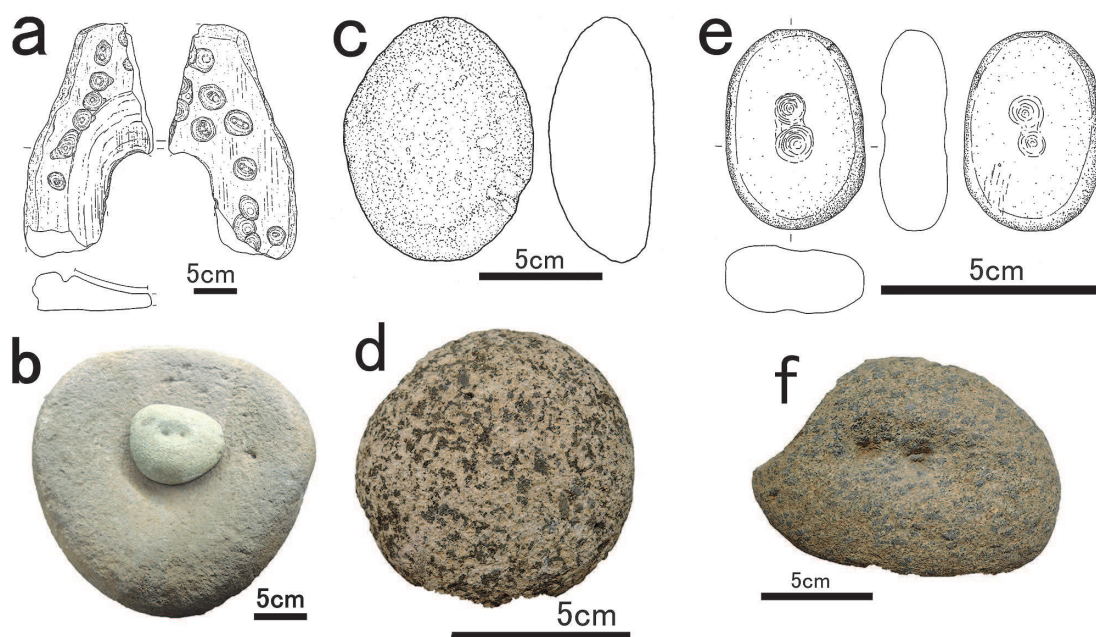


図7 石皿、磨石、凹石

a: 緑泥石片岩製の石皿（稲荷上遺跡 石塚・安井，2017）b: 安山岩製の石皿と凝灰岩製の磨石（虫草山遺跡）
c: 安山岩製の磨石（景台遺跡 加藤，1997）d: 閃緑岩製の磨石（谷上遺跡）e: 砂岩製の凹石（八幡台遺跡 吉田・高橋，2011）f: 変斑れい岩製の凹石（谷上遺跡）

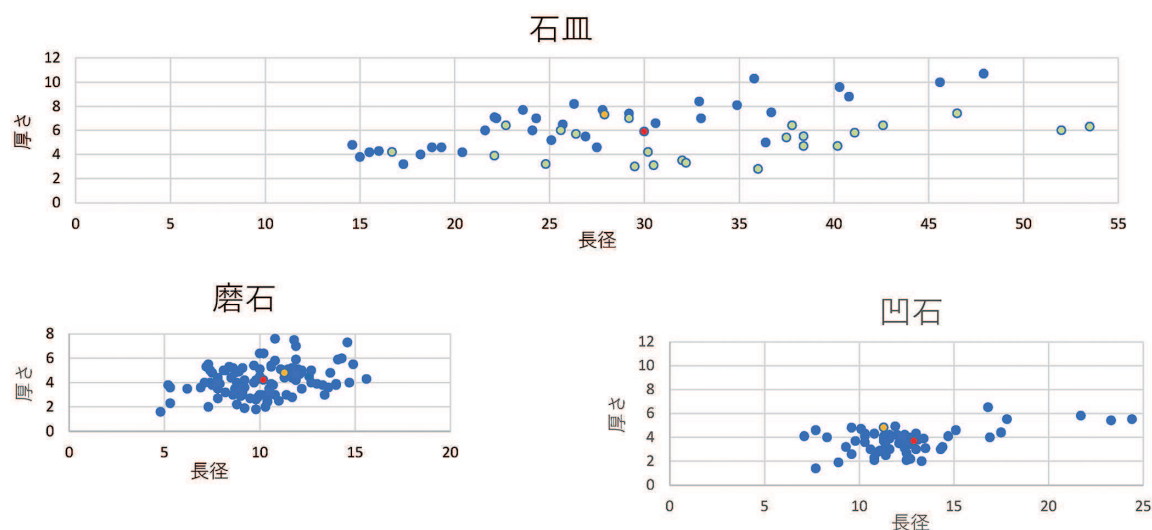


図8 石皿、磨石、凹石の長径と厚さの計測結果（cm）

調査個数 石皿：56個、磨石：100個、凹石：64個。 ●: 結晶片岩、●: 本報告の平均値、●: 山本（1989）による平均値。

長径12.9cm、厚さ3.7cmである。磨石は凹石より長径が小さく、厚さが厚い。なお、山本(1989)によるそれぞれの平均値は、石皿で長さ27.9cm、厚さ7.3cm、そして磨石および凹石で11.3cm、4.8cmである(図8)。

1) 石皿、磨石および凹石の石材

石皿の石材利用傾向は、小川町と飯能市地域を除くと、閃緑岩および結晶片岩の占める割合が高く、閃緑岩では17~49%、結晶片岩では21~42%を占める(図9)。小川町と飯能市地域では41%および50%と閃緑岩の割合がやや低いが、緑色岩が41%および16%と他地域と比べて高い特徴がある。安山岩は調査地域の南東部で19%を占めるが、他地域では

7%以下と低い。

磨石および凹石の石材利用傾向は、石皿と比べて砂岩または閃緑岩の占める割合が高くなり、結晶片岩の占める割合が低くなる。砂岩では28~53%、閃緑岩では16~54%を占め、結晶片岩では15%以下となる。小川町地域では、緑色岩と変斑れい岩の占める割合が50%ほどである。調査地域の南東部では、安山岩の占める割合が29%および20%と高く、石皿と同傾向を示す。

次に、石皿は磨石および凹石と比べて長径が大きいことから(図8)、遺跡内から産した結晶片岩と安山岩製の石皿の最大長径(cm)を図10に示した。石皿は完形であることは少なく、欠損していることが多い。北権

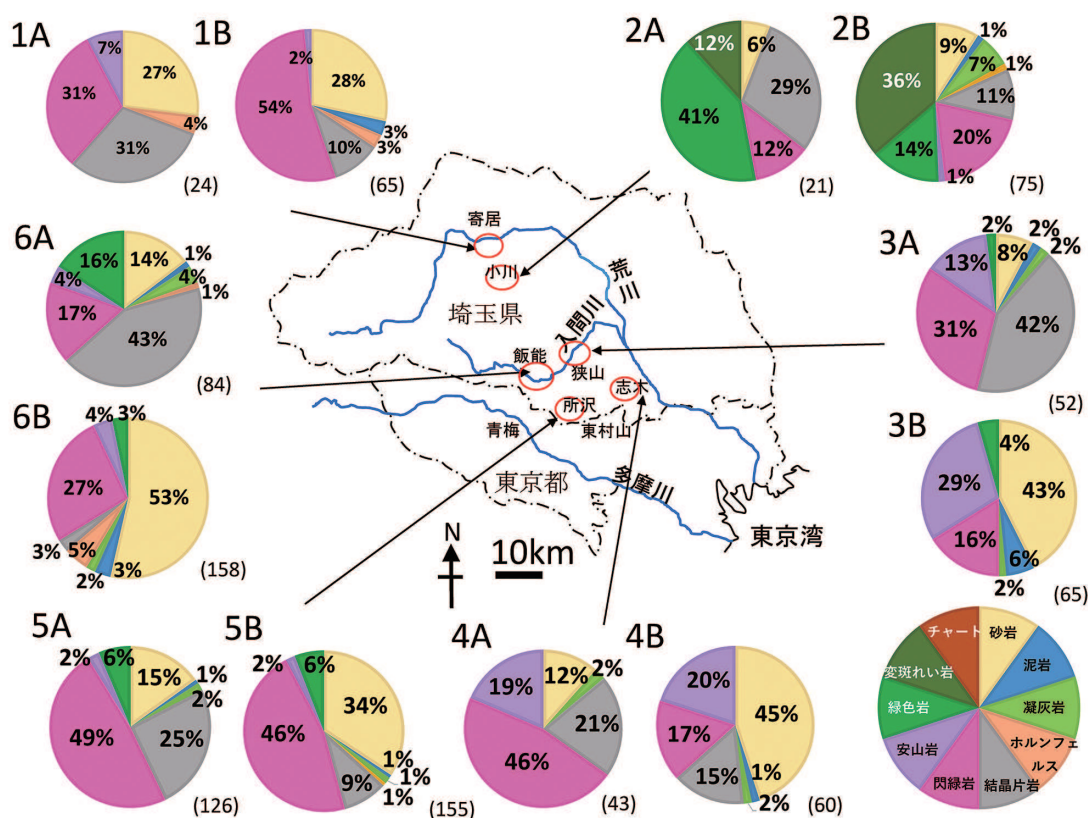


図9 石皿、磨石および凹石の石材利用傾向 A: 石皿 B: 磨石・凹石 (): 調査個数

1: 増善寺遺跡(石塚, 1995), 南大塚遺跡(小林, 2001), むじな塚遺跡(高橋・新井, 2007など) 2: 八幡台遺跡(高橋・新井, 2007など), 谷上遺跡(吉田・高橋, 2015) 3: 鶴ヶ島中学西遺跡(齊藤・早川, 1997), 稲荷上遺跡(石塚・安井, 2017), 北権現遺跡(清水, 2007), 景台遺跡(加藤, 1997) 4: ハケ遺跡(鍋島ほか, 2018), 長宮遺跡(越村, 2009), 松の木遺跡(隅本・堀, 2009), 氷川前遺跡(佐藤, 2022), 西ノ原・東台遺跡(梶原・花岡, 2004), 稲荷前遺跡(堀, 2005), 西原大塚遺跡(尾形・深井, 2007) 5: 海谷遺跡(中島・新藤, 2003a, b), 東原遺跡(古谷, 2017), 西内手遺跡(古谷, 2018) 6: 加能里遺跡(熊澤, 2016), 坂東山遺跡(齋藤, 2005), 水窪遺跡(埼玉県入間市遺跡調査会, 1992)

水子貝塚（富士見市教育委員会，1995）に報告がある。また、安山岩では多孔質安山岩製の石器が、西ノ原遺跡（梶原・花岡，2004）を含む埼玉県南部地域に多くみられる（図10）。埼玉県外では、東京都の多摩ニュータウン遺跡（東京都埋蔵文化財センター，1986）などからも報告されている。ふじみ野市のハケ遺跡（鍋島ほか，2018）の多孔質安山岩には、0.5～5mm径の円形～楕円形をした孔が多数みられる（図13）。

5. 考察

1) 打製石斧の石材利用

本報告により、埼玉県における打製石斧の石材利用傾向では、秩父市を除いて砂岩とホルンフェルスが70～87%、泥岩が6～20%を占める。砂岩とホルンフェルスの比率は、狭山市の南東では同率または砂岩50～63%と卓越し、狭山市の北西ではホルンフェルスが49～64%と卓越する結果となった。

砂岩やホルンフェルス製の打製石斧の表面には、自然面や原礫面が残っているとのことから、河原または礫層の礫を利用したことが想定される。図14の河原と礫層の礫種とその構成比において砂岩が35～75%を占めることから、打製石斧の石材としての砂岩礫は荒川、入間川および多摩川の河川礫、さらに飯能層と段丘礫層の礫から容易に採取できたと考えられる。このことは、長崎（2011）による旧石器時代の石斧の石材は、立川礫層や多摩川の河原の礫を利用したとの推定と調和する。

一方、河原の礫の礫種構成においてホルンフェルスの占める割合は、多摩川下流部で22%と多く、狭山市の入間川中流部で6%、寄居町の荒川でも6%である（図14）。また、飯能層の礫層に10%、所沢の段丘礫層にも7%ほどのホルンフェルス礫が含まれている。

打製石斧の石材利用傾向で、ホルンフェルスが50%も占めることは、河川礫や礫層から、打製石斧の石材としてホルンフェルスを利用することができ、選択的に採取されたと考えられる。ホルンフェルスは緻密で硬い岩質で破断面は尖ることから、打製石斧の石材として良い石材であったと推定される。



図11 点紋のある緑泥石片岩製の石皿（八王子遺跡）



図12 点紋のある緑泥石片岩（西ノ原遺跡）

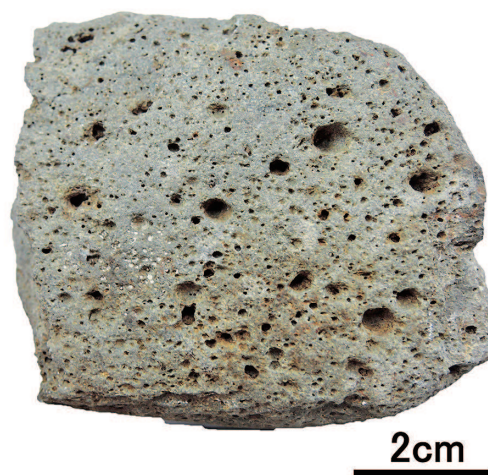


図13 多孔質安山岩製の磨石（ハケ遺跡）

なお、松岡（2007）によると、飯能市より上流の河原の礫には、ホルンフェルス礫がみられないことから（図14-⑩）、入間川中流部の河川のホルンフェルス礫は、段丘礫層の礫から由来したと推定された。

上記の推定は、柴田（2003）による千葉県

鎌ヶ谷市の根郷遺跡では、打製石斧の岩種組成がホルンフェルス64%、砂岩25%を占め、多摩川流域の武蔵野台地方面から運び込まれたと推定されたこととも調和する。

小川町の市街地付近での打製石斧の石材利用傾向は、凝灰岩、緑色岩および変斑れい岩が28～80%を占める（図6）。また小川町を流れる槻川の河原の礫種とその構成比は、緑色岩および変斑れい岩が59%を占めることから（図14-③）、上記のことと矛盾しない。

一方、秩父では打製石斧の石材は閃緑岩が32%、ホルンフェルスと緑色岩が20%も占めるが、近接の荒川の河原の礫種構成ではそれぞれ数3%しか含まれていないことから、選択的に採取されたと考えざるを得ない。

2) 石皿、磨石および凹石の石材利用傾向

石皿の石材利用傾向は、小川町を除いて閃緑岩および結晶片岩が60～74%を占める（図

9）。磨石および凹石の石材利用傾向は、石皿と比べて砂岩の占める割合が高くなり、結晶片岩の占める割合が低くなる。板状の特徴を呈する結晶片岩は石皿の石材として利用しやすく、楕円形や卵形を呈する磨石と

凹石の石材には不向きとされたと考えられる。このことは、本報告による石皿の形状が、磨石および凹石よりも薄く広い板状をしていることから支持される。そして、これらの平均値は山本（1989）が報告した平均値と近似しているが、石皿の厚さの平均値に差がある。これは石材利用傾向において、山本（1989）では安山岩が51.1%、結晶片岩は1～10%を占めることと関連すると考えられる。

斉藤、早川（1997）および石塚（2007）は、砂岩と安山岩製の磨石や凹石は円礫の自然石がそのまま利用されているとし、これらの石材は礫層や河川の礫を選択的に採取した

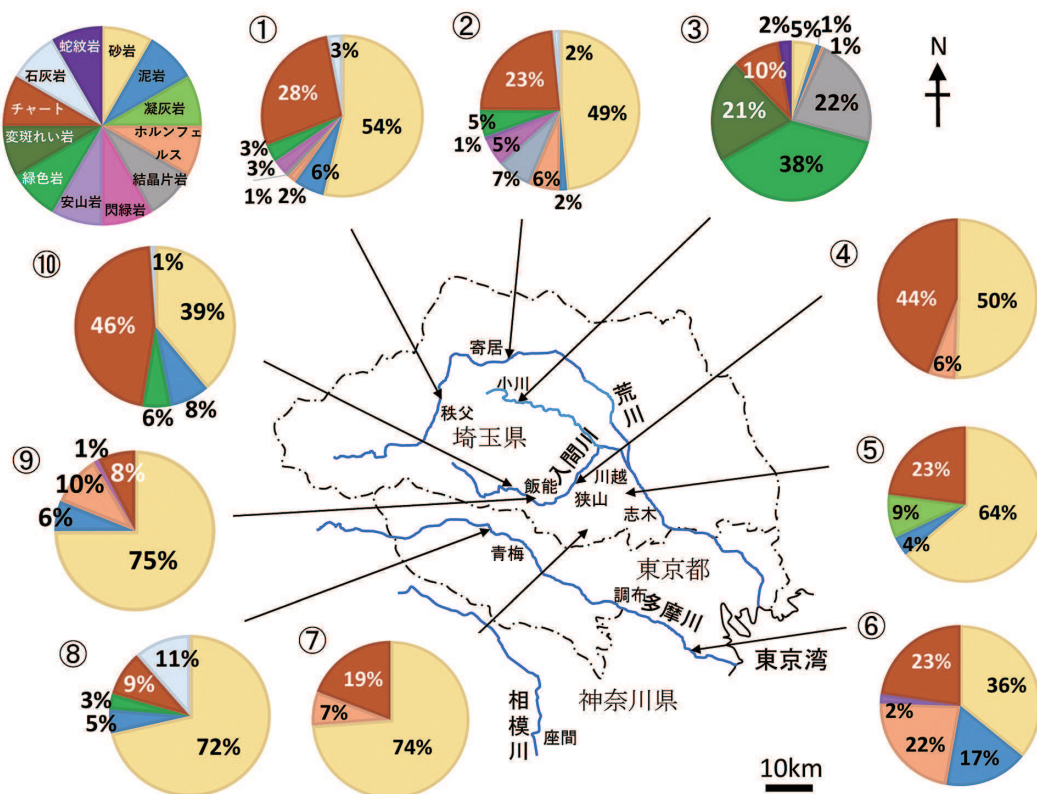


図14 河原と礫層の礫種とその構成比

①秩父市黒谷の荒川河床（力田ほか，1999） ②寄居町小園の荒川河床（力田ほか，1999） ③小川町遠山の槻川河床（力田ほか，1999） ④狭山市柏原の入間川河床（松岡，2007） ⑤ふじみ野市権現山の武蔵野礫層（角田ほか，1999） ⑥二子多摩川の多摩川河床（比田井，1995） ⑦所沢市上新井調整池の礫層（松本，2003） ⑧奥多摩町氷川の多摩川河床（松本，1993） ⑨飯能市の飯能層の礫層（松本，2000） ⑩飯能市稲荷の入間川河床（力田ほか，1999）

と考えた。石皿、磨石および凹石の石材利用傾向として、閃緑岩が17～49%を占めることは、閃緑岩が礫層や河川の礫から採取できたためと考えられる。鈴木、江藤（2010）によると、座間市の相模川の河原の礫には、閃緑岩が11%含まれていることから、閃緑岩の礫の採取地の可能性がある。一方、安山岩は調査地域の南東部で13～29%を占めるが、埼玉県内での河川礫には、安山岩はみられないため、他地域から搬入されたと考えられる。

山本（1989）の報告によると、縄文時代の人々は石器製作の際には、石器の種類・形態により意図的に石材を選択し、目的に応じた石材利用を行っていた可能性が強いとした推測と今回の調査結果は調和する。

3) 結晶片岩と安山岩の石材の採取地

結晶片岩の石材が、埼玉県の河原の礫として採取できるのは秩父市から長瀨町と寄居町の荒川沿い、小川町から嵐山町の槻川沿いに限られている（図14）。そして、長瀨町に分布する結晶片岩は無点紋片岩であり、寄居町と小川町付近に分布する結晶片岩は点紋片岩である（牧本・竹内，1992）。埼玉県内の10地点の遺跡の石皿などの緑泥石片岩は、点紋片岩であることから（図10）、寄居町と小川町付近に分布する結晶片岩が利用されたと考えられる。さらに、石器の石材として利用されている紅れん石片岩は、小川町の東端から嵐山町に分布することから（小川町史編纂委員会，1998）、結晶片岩の石材は小川町付近に限定される可能性がある。

黒坂（2008）によると、坂戸市と川越市の境界付近の牛原遺跡の敷石には、長径50～70cmの結晶片岩が14枚も利用されており、最大の絹雲母片岩では大きさ138×85×5.5cmで重さ102kgもある。そして、これらの結晶片岩には矢穴列痕（図15）が存在することから、小川町から嵐山町の槻川沿いに露出した結晶片岩（図6）が切り出され、筏により都幾川を経由して運ばれたと推定された。なお、山本（1989）による石皿の長さの平均値は27.9cmであり、各遺跡での結晶片岩製石皿の最大長径40～50cm（重さ4kg程）であることから、石材の切り出しやすさと関係すると考えられる。

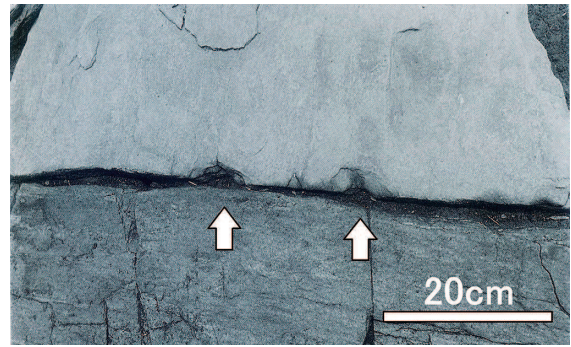


図15 牛原遺跡の緑泥石片岩の敷石にみられる矢穴列痕（黒坂，2008）。矢印：矢穴列痕。
敷石の大きさ：58×72×3.5cm，重さ：19.6kg

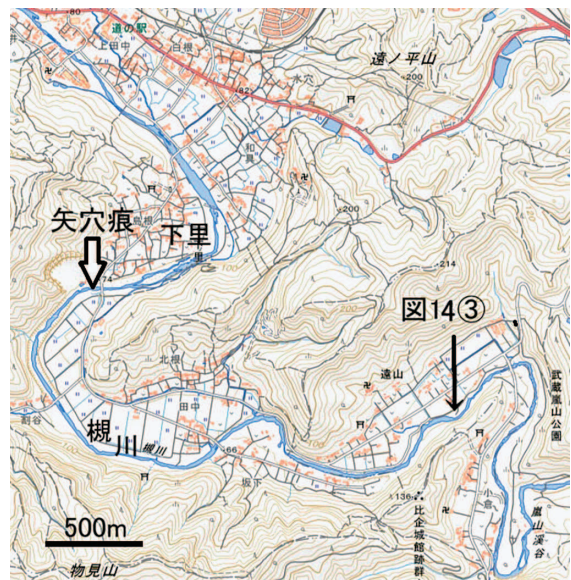


図16 小川町下里、槻川の河床の緑泥石片岩にみられる矢穴列痕とその位置図（2024年11月撮影）。
図14③：河原の礫種調査地点。
地理院地図に加筆

小川町教育委員会の高橋好信氏によると、小川町下里の槻川の河床に露出する緑泥石片岩には、矢穴列痕がみられる（図16）。この矢穴列痕のつくられた時期は不明であるが、

槻川沿いに露出した結晶片岩が切り出された証拠になる可能性がある。

一方、安山岩製の石皿、磨石および凹石の利用傾向は、調査地域の北部で7%以下、南東部で13~29%を占める。斉藤・早川(1997)および石塚(2007)によると、安山岩製の磨石や凹石は円礫の自然石がそのまま利用されているとしている。安山岩礫は埼玉県の河原では存在しないが、多摩川と近接する立川段丘礫層から報告されている(図14-⑥ 比田井, 1995)。鈴木・江藤(2010)によると、座間市の相模川の河原の礫には、箱根山地系の安山岩が3.7%含まれている。また、石器の石材に多孔質安山岩が報告されており、埼玉県南部地域に多く(図10)、東京都の下宅部遺跡(戸沢ほか, 2006)や多摩ニュータウン遺跡(東京都埋蔵文化財センター, 1986)、神奈川県の大日野原遺跡(小林ほか, 2020)や吉井城山第1貝塚(赤星, 1962)にもみられる。この多孔質安山岩は、神奈川県立生命の星・地球博物館の山下浩之氏によると、伊豆、箱根、富士山起源の可能性があるとのことである。大工原、千田(1988)によると、多孔質安山岩製石器は群馬県の古城遺跡に報告されているが、上記のことから埼玉県の安山岩の石材は箱根方面で、相模川の礫が採取された可能性が高い。

ところで、縄文時代前期の河川流路において現在と比べて異なるのは、利根川が荒川に合流していたと考えられている(平社, 2024など)。三田・野村(2008)によると、群馬県伊勢崎市長沼町の利根川の河原の礫種は、安山岩25%、閃緑岩12%ほど占め、ホルンフェルスはみられない。利根川の河原の礫は、石器の石材として採取された可能性があるが、今後の検討課題である。

終わりに

かつての勤務校である埼玉県立川越女子高校に石斧が保管されていたことから、その石材を調べたことがある(松岡, 2017)。石斧の表面観察からホルンフェルスと推定し、埼玉県南部を流れる柳瀬川の河原の礫を採取して比較した。ホルンフェルス礫は、古多摩川の堆積物である武蔵野段丘礫層から由来したと考えた。しかし、これら石斧は1930年ころ

に採取されたとのことで、産出地点や年代などは不明であった。今回は、産出地点や年代などが明らかな各市町村の埋蔵文化財調査報告書の資料がある図書館および埼玉県埋蔵文化財センターの資料室を利用した。実物の石器を確かめる機会が少なかったものの、ふじみ野市、小川町および鶴ヶ島市の石器について観察することができた。今回の調査により、牛原遺跡の緑泥石片岩の敷石に矢穴列痕が報告されていることから、すでに縄文時代に石を切り出す技術が存在したことには驚かされた。中世の矢穴や矢穴列痕は小川町下里の結晶片岩で報告されているが(小川町教育委員会, 2014など)、この敷石の矢穴列痕は縄文時代であることから埼玉県内最古のものと考えられる。

謝 辞

ふじみ野市教育委員会の岡崎裕子氏、小川町教育委員会の高橋好信氏および鶴ヶ島市教育委員会の本多 良氏には、石器について教示をいただいた。神奈川県立生命の星・地球博物館の山下浩之氏および関東山地研究グループの方々には助言をいただいた。記して感謝する。

引用文献

- 赤星直忠(1962) 横須賀市吉井城山第一貝塚の石器(1). 横須賀市博物館研究報告 人文科学 6: 45-56.
- 大工原豊(2008) 縄文石器研究序論. 六一書房.
- 大工原豊, 千田茂雄(1988) 古城遺跡. 安中市教育委員会社会教育課.
- 早坂廣人, 隅本健介(1999) 勝瀬原遺跡群 第2章 中沢遺跡の調査. 富士見市遺跡調査会調査報告 第52集. pp. 12-165.
- 平社定夫(2024) 第6節 利根川の中川低地への移動. 春日部市史 自然史編. pp. 185-192.
- 比田井民子(1995) 多摩川支流の考古学的遺跡における石器石材の獲得と活用について—野川, 仙川, 大栗川, 乞田川流域を中心として—. とうきゅう環境浄化財団(一般) 研究助成 90: 1-54.
- 富士見市教育委員会(1995) 水子貝塚 史跡

- 整備事業に伴う発掘調査報告書. 富士見市文化財報告 第46集. pp. 17-28.
- 古谷芳貴 (2017) 東原遺跡―第1次調査―遺物編. 所沢市埋蔵文化財調査報告書 第70集, 埼玉県所沢市教育委員会.
- 石田由紀子 (2024) 博物館 Dictionary No. 232～あなたに語る・時代を超えて生きる心～. 京都国立博物館. <https://www.kyohaku.go.jp/learn/home/dictio/> (2024年10月15日閲覧)
- 石塚和則 (1997) 宮地遺跡 第5次調査. 狭山市埋蔵文化財調査報告書10. 狭山市文化財調査報告 第19集.
- 石塚和則 (2007) 宮地遺跡 第6次調査. 狭山市埋蔵文化財調査報告書15. 狭山市文化財調査報告 第26集.
- 石塚和則, 安井智幸 (2017) 稲荷上遺跡第6次調査. 狭山市遺跡調査会報告 第26集.
- 加藤恭朗 (1997) 景台遺跡 ―景台遺跡発掘調査報告書Ⅲ―.
- 梶原 勝, 花岡秀雄 (2004) 西ノ原遺跡Ⅲ―西ノ原遺跡第69・75・77・88地点の発掘調査概要報告書―. 大井町遺跡調査報告 第13集.
- 小林謙一, 中川雅人, 西本志保子, 小澤政彦, 大野朝日, 金子悠人, 小林尚子ほか (2020) 大日野原遺跡―第4次発掘調査―. 中央大学文学部考古学研究室調査報告書 5 : 1-62.
- 熊澤孝之, 油布憲昭 (2015) 飯能の遺跡 (42) 加能里遺跡第41次調査. 飯能市内遺跡発掘調査報告書 19 : 1-99.
- 黒坂禎一 (2008) 牛原 / 御新田 / 番匠・下道 / 横沼新田 / 北谷. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書. 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団.
- 牧本 博, 竹内圭史 (1992) 寄居地域の地質. 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅).
- 松岡喜久次 (2007) 入間川で実施した“河原の石の仲間分け”―講座地学の授業での調査結果―. 埼玉県立豊岡高等学校紀要 32 : 13-16.
- 松岡喜久次 (2017) 埼玉県立川越女子高校に保管されている石斧とその供給地の推定. 地学教育と科学運動 79 : 39-42.
- 松岡喜久次 (2024) 埼玉県の縄文時代の石器の石材―打製石斧, 石皿, 磨石および凹石―. 地学団体研究会第77回つくば総会, ポスターセッション.
- 松本昭二 (1993) 地ハイ調査報告「河原の石の仲間わけ」. 地ハイだより 18 : 16-17.
- 松本昭二 (2000) 地ハイ調査報告 河原の石の仲間わけ (19). 地ハイだより 38 : 6.
- 松本昭二 (2003) 地ハイ調査報告〔地ハイ373回〕地層の石の仲間づくり. 地ハイだより 48 : 3-4.
- 三田照芳, 野村正弘 (2008) 利根川・神流川の河川礫調査. 群馬県立自然史博物館, 自然史調査報告書 4 : 63-73.
- 宮崎朝雄, 石川安司, 植木智子, 富田和夫, 村上伸二, 植木 弘 (2003) 奥東京湾と貝塚の分布. 嵐山町博物誌・第四巻 考古・歴史編, 丘陵の叙事詩―嵐山町の原始・古代―第二節 縄文文化拡がる.
- 鍋島直久, 越村 篤, 岡崎裕子 (2018) ハケ遺跡19地点. ふじみ野市埋蔵文化財調査報告 第22集. pp. 24-66.
- 長崎潤一 (2011) 石器研究の基礎的整理―後期旧石器時代後半―. 早稲田大学大学院文学研究科紀要 50 : 67-78.
- 中島岐視生, 新藤 健 (2003a) 第二椿峰遺跡群 海谷遺跡 第1～9・12・13・16～18次 (第1分冊). 所沢市埋蔵文化財調査報告書 第31集.
- 中島岐視生, 新藤 健 (2003b) 第二椿峰遺跡群 海谷遺跡 写真図版 (第3分冊). 所沢市埋蔵文化財調査報告書 第31集.
- 小川町史編纂委員会 (1998) 小川町の自然地質編. 小川町.
- 小川町教育委員会 (2014) 下里・青山板碑石材採掘遺跡群―割谷採掘遺跡―. 小川町埋蔵文化財調査報告書33.
- 力田正一, 松本昭二, 岡野裕一, 阿比留稔 (1999) 河原の石の仲間分け (その2) ―礫種調査結果報告―. 地学教育と科学運動 31 : 39-44.
- 齊藤 稔, 早川百利子 (1997) 鶴ヶ島中学西遺跡 発掘調査報告書.
- 柴田 徹 (2003) 鎌ヶ谷市内の縄文時代遺跡から出土した石器の石材について. 鎌ヶ谷市史研究 16 : 83-132.
- 清水理史 (2007) 北権現遺跡 第3次調査

発掘調査報告書．鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告 第60集．

鈴木美香，江藤哲人（2010）相模川下流域の河原礫の形態分析と礫種組成．横浜国立大学教育人間科学部紀要 4．自然科学 12：17-35．

高橋好信，新井 貴（2007）八幡台遺跡（17次）．小川町埋蔵文化財調査報告書 第26集．pp. 10-18．

東京都埋蔵文化財センター（1986）多摩ニュータウン遺跡（第3分冊）．東京都埋蔵文化財センター 第7集．

戸沢充即，千葉敏朗，石川正行，小川直裕，秋元雅彦（2006）下宅部遺跡 I．東京都市

整備局西部住宅建設事務所，東村山市遺跡調査会 下宅部遺跡調査団．

角田史雄，清水康守，小川政之，松岡喜久次（1999）I 自然史 第2章地質 4 台地の地形と地層．上福岡市史 資料編第1巻 自然史・考古．pp. 42-92．上福岡教育委員会．

山本 薫（1989）縄文時代の石器に使われた岩石および鉱物について—石器製作における石材の選択とその背景—．地学雑 98：79-101．

*本報告において、図表類中の各市町村の埋蔵文化財調査報告書については省略した。